

小樽商科大学外部評価総評

評価項目：修学面における学生支援

外部評価委員会委員長 土橋 信男

外部評価委員会として依頼を受けた修学面における学生支援について、評価対象項目は①科目履修に関する支援など4項目である。その4項目それぞれについて、小樽商科大学がこれまで継続して努力を重ねてこられたことは、周到に準備をされた自己評価書において詳細に記されており、そのご努力に関しては外部評価委員全員が高く評価するものである。

しかしながら、なお以下の諸点において改善の努力を図られることが、大学の教育の実を挙げるためには必要であろうと思われる。

①学生の科目履修に関する支援

(1) シラバスについて

シラバスに関しては、学生の満足度やアンケートの意見などを見る限り、まだまだ改善を図ることが必要であろう。CD-ROM化、ホームページ化、分冊化（あるいはルーズリーフ化）等、多くの可能性がある。問題は、学生が最も使用しやすい方式で、かつ無駄を少なくするためにはどうしたらよいか、工夫と改善を期待したい。

(2) 履修指導について・・・特に新生生に対しての

履修指導やその手続きに関しては、履修指導教官制度はまったくというほど機能していないので、できるだけ早く改善すべきであろう。1人の教官が100人の学生を指導するのは無理がある。全教官が協力して参加する方式をつくるべきである。

そもそも大学教官は、学生特に新生生に対してどのように対処しようとしているのだろうか。全教官が新生生をどのような姿勢で受け入れるかは、その後の学生の勉学への姿勢や意欲に大いに影響するであろう。そのことを考えれば、全教官が一致協働して履修指導に当たるのは当然であり、教官の教育義務の第一歩ではないのか。

小樽商科大学へ暖かく迎え入れ、これからの4年間（+アルファ）に社会へ自信をもって小樽商大の卒業生として送り出す大きな仕事の第一歩であり、また希望に燃えて入学してくる進入学生と接触する良い機会でもであろう。全教官の協力を得て新生生によき履修指導を行なうことができるかどうかは、魅力ある教育機関としての小樽商科大学づくりの第一歩だといっは言いすぎだろうか。

ところで、新生生の履修指導に上級生の協力を得る方法を検討することが望ましいというのが委員一同の意見であった。一定の条件（成績や単位履修程度など）を付して、また無償ではなく有償（アルバイト、または奨学金など）も視野に入れて検討して見てはいかがだろうか。

(3) キャップ制について

キャップ制については、学生から最も多くの不満や苦情が寄せられているようであるが、その理由の一つは大学の説明不足にあるように思われる。何故キャップ制が必要なのか、その制度の趣旨を充分説明することが必要であろう。

しかし、これはまだ始めたばかりであり継続して説明を充分しつつ実施していくことが必要であろう。なお、経過を踏まえて上限を学年によって多少弾力化するなどの工夫はありえよう。

(4) ゼミについて

ゼミについては、大学で唯一の少人数での知的指導が可能な機会であり、これからも継続して小樽商科大学の教育の特色として重点的に支援をしていくことが望ましいと思われる。

特に、ゼミ室が充分備わっていることや、ゼミ指導への意欲を強くもっている教官の存在は小樽商科大学の強みであり、それを生かして、学生全員の必修プログラムとして、卒業論文を書くことも含めて、小樽商科大学の大きな特色として強めていってはいかがか。

このゼミプログラムをよりよくするための工夫をさらに行っていくことは重要であろう。

その一つはオープンゼミの拡大である。すなわち、すべてのゼミに対してオープンゼミを実施するようにし、「オープンゼミ期間」の設定をして、その期間にはすべてのゼミ室を開き、入室して見学できるようにしてはいかがであろうか。

また、希望の教官のゼミを取れなかった場合には、他のゼミに配置されたとしても、複数指導が可能にするとか、弾力的なシステムをつくるべきであろう。

② 学生の自習環境の整備：

図書館、情報処理センター、言語センター、国際交流センター、ゼミ室などについては、自己評価でも学生の満足度は高く（特に情報処理センターは非常に充実している）、また比較的少人数の大学でもあるため、よい学習環境が備えられているといえよう。

しかしながら、さらに良い環境を工夫することが魅力ある自習環境の整備を可能にするのではなかろうか。

たとえば、コンピュータの利用を、情報処理センターとその実習室に限定せずに、キャンパスのあらゆる場所において可能にするような施設のあり方を目指してみてはいかかであろうか。

すなわち、学生が持参のコンピュータが図書館、自習室、演習室、そして講義室など、どこでも電源コンセントや情報コンセント（あるいは無線LAN）で利用可能であれば、きわめて魅力的な情報キャンパスができる。こうしたことは小さい大学だからこそ可能な企画ではないかと思われる。

また、図書館の開館時間の延長も必要な改善ではないだろうか。現在は7講目の講義終了

の10分後には閉館になるようであるが、それでは最終講義履修者には利用しにくい。情報処理センターはもっと遅くまで開かれているので、閉館時間をそれと合わせてはいかがなものか。

図書館に対する蔵書への不満あるいは要望（文芸書が少ないという）に対しては、大学図書館の考え方にもよるが、そうした声に応えることも意味のあることのように思われる。たしかに大学図書館は専門分野の研究のために専門書を中心に蔵書構成を行なっているといえようが、大学は同時に青年期の間形成を行なう場でもある。特に小樽商科大学がその先輩に著名な文学者を持っているということを考えれば、文芸書にもっと力点をおくことは大いに意味のあることではなかろうか。そしてそれは専門書に比較すればそれほど多額の予算を必要としないのではないか。

あるいは、この点においては小樽市立図書館と協力関係をもって、その分館を大学内に置くなどの工夫もありえるのではないか。独立法人化のあかつきにはそうしたことは容易に可能だと思われる。

なお、これらの施設・設備の充実や利用のしかたの改善のためには、利用者である学生の意見をさらに継続して聞くことが必要であろう。そして理のあるものについては取り上げ、改善を図った後にはその結果を学生へ向けて知らせること（フィードバック）が肝要である。

③ 学生の修学に関する支援：

このことに関しては、自己評価書によると、問題があつて修学支援を必要とする学生は極めて少ないようであるにもかかわらず、大学としては、それらの学生へのきめ細かい支援をしているようである。

例えば、メンタルヘルスケアに関しては、「学生なんでも相談室」は高く評価できる。学生が気軽に訪れ、相談できる場所があることは、多くの学生にとって大学をより身近に感じさせるものといえよう。

実際には、学生相談件数は全国平均に比して極めて少ないと報告されており、そのことは大学が健全な教育環境を提供していることを示しているのかもしれないが、さらにより良い環境づくりをめざしていただきたい。

④ 学生支援のありかたについてのフィードバックシステム：

この度の外部評価実施のために「修学面における学生支援に関する調査」を学生の意見もふまえて調査項目をつくり実施したことは、すでに優れたフィードバックを行なったこととして高く評価できる。

この調査の設問項目への統計的な数値により、大学の修学支援に関する施設設備や制度に対する学生の満足度について、全体的状況を理解することができる。

しかし、この調査で書かれた自由記述による具体的な疑問、不満、意見などから何を読み

取るかがより重要であろう。既に、そのことは学内で検討されていると思われるので、ここでは述べる必要はないであろうが、一点のみ指摘すれば、それは最後の設問23の大学に対する要望や意見についての自由記述が示している内容である。すなわち、ここでは、大学の教育内容（授業や教科のありかたなど）についての意見が非常に多く、そこに大きな課題があることを示している。

小樽商科大学で行なわれている教育内容についてのフィードバックシステムとしては、「授業改善のためのアンケート」（共通型、個別型・講義科目）があるが、それについては今回の場合には全体統計が公表されているのみで、個人別や科目別には公表されていない。

今回の評価は修学面における学生支援についてであったが、大学における修学で最も重要なのはいうまでもなく授業を中心とした教育によるものである。したがって、大学の授業の充実が最も優れた修学支援であり、大学の授業の充実や改善には、受講者である学生のフィードバックとしての授業評価が最も重要な資料を提供するのではなかろうか。

そしてそれは公開されるべきものであると考えるのがいかがであろうか。

小樽商科大学がよりより大学づくりをめざそうとするのであれば、講義科目の授業評価の公開を行い、その結果を踏まえた改善は必須ではなかろうか。（経済学科で過去におこなった授業評価については公開しているので、公開は充分可能であると思われる）

なお、公開にあたっては、科目履修人数及び成績別単位取得者数も併せて公開すべきであろう。それは評価の客観性を提示し、また楽勝科目への一つの警告にもなるからである。

ところで、重要なことは授業評価を何のために行なうのか、その視点が常に問われることである。授業評価は、大学の授業をよりよりものにするという進歩・改善のための手段である。したがって、そこで出された学生の評価あるいは意見が、改善に反映されること、また出された評価や意見をめぐって可能な限り率直な意見交換が持たれ、それを踏まえての授業改善が行なわれ、授業が魅力あるものとなり、授業を通じて学生が成長し自己実現を図っていくことができることである。

いずれにせよ、これからの魅力ある大学づくりの中心になるべきものは大学の授業を中心とした教育であることは間違いないので、それをどう可能にするかがよき大学作りの鍵であるといえよう。そのためには授業評価は必須であり、大学教官は授業評価に前向きに取り組み、授業の受けてである学生の協力を得てよりよい授業づくりに取り組むことが強く期待される。

なお、既に14年前から民間の企業が行い始めた、全国規模の学生の大学生活（教育、教育環境および生活環境）などに関する満足度調査（小樽商科大学は学生数が少ないので対象とされていなかった）と同じ内容項目の調査を自主的に行なって比較し、大学の内容改善をはかることも、これからできることの一つであろう。

おわりに

外部評価委員の構成は、極めてバランスよく、また委員それぞれが個性的なコメントによ

り評価をしていただいたが、特に意見の対立はなかった。したがって、各委員の出していただいた評価シートの内容を委員長として、その責任においてまとめさせていただいた。

最後に、各委員から提出された大学のありかたをめぐるコメントを踏まえて、大学評価に関わることについての全般的な事に関しての意見を付して、この大学外部評価の責を果たしたい。

まず、大学が自己評価を行なうということの意味についてであるが、それは法律によって課されたから（歴史的事実はそうであるが）という後ろ向きの姿勢ではなく、大学が社会から賦与されている大学の自治に応えるための説明責任（アカウンタビリティ）であるとして、前向きにつまり積極的に行なうべきであるということ。そして、今回の小樽商科大学の取り組みは、そうした前向きの姿勢が極めてよく見られることから、そうした取り組みの姿勢を高く評価できるというものである。

しかしながら、大学問題に関する蔵書が図書館に殆ど見られないのは残念であるという指摘があった。大学教官に近年の大学問題についての関心を持ってもらうためにも、数百を超えるそうした関係図書のうちから主たるものを揃えていただくことが望ましいと思われる。

また、説明責任についてさらに言及すれば、国民の税金によって支えられている国立大学の教育・研究費の内訳（たとえば学生一人当たりどのくらいの経費がかかっているかということについて）についても意識していただき、説明できるようなありかたが望ましい。これから独立法人化に向けてそのことはますます問われることになるのであろうから。

これからの大学は、ますますその教育の質が問われ、ほんものの教育が要求されるようになるであろう。その時に備えて、ほんものの教育の追及を、その受け手である学生（その果実である卒業生もふくめ）と行なっていくことが、よりよい大学づくりになるのではなかろうか。

繰り返すことになるが、大学の評価（自己評価、そして外部評価）はそのために欠かすことができないし、またそのためには非常に多くの作業を必要とするものである。

このたびの修学面における学生支援の評価は特に多面的な内容を有するために膨大な作業を必要としたことと思われる。外部評価委員のわれわれに提供していただいた資料がそれを物語っている。そうした作業を行なわれた大学評価委員会、特に外部評価専門部会の各位に敬意を表し、また資料を作成するに当たって労した関係教職員の方々のご苦勞に謝意を表したい。

学長をはじめ、副学長、学部長、事務局長のリーダーシップによる大学評価を通じての大学づくりによって、北にますます燦然と輝く一星としての小樽商科大学の未来に期待したい。